

中国の大学における職業生涯教育の拡大とその課題

— 山東省3大学を事例に —

高 静

(2013年10月13日受理)

Recent Expansion of Career Education into Higher Level
and Concerning Issues in China: A Case Study of Shandong

Gao Jing

Abstract: This paper shows the course of the expansion of 'career education' into higher education in China and analyses the issues concerned by focusing on education policy implementation and an estimation of people in college in Shandong. As the job shortage problem for university graduates has worsened, 'career education' has been widely implemented in Chinese higher education settings. However, the China's 'career education' efforts have many problems, such as the lack of teachers with specialisations. Only a few surveys to date have investigated the process and actual conditions surrounding the construction of these problems. In this paper, the course of the expansion and the present condition of 'career education' in Chinese universities will be investigated. The following conclusions have been reached: (1) 'career education' in Chinese university is a concept that was introduced quickly via policy and expanded by the same; moreover, correcting a college student's employment consciousness is emphasized as the main purpose of such programmes; (2) the programmes' execution has a tendency to emasculate staff's efforts; (3) although a few of the employment instruction faculty at the university level emphasize the effect of 'career education', many of them suspect the meaning and lack of power behind the programmes; and, (4) while the college students expect to receive career support from the university, they are denied 'career education' while there.

Key words: Career Education, Concerning Issues, Higher education in China

キーワード：職業生涯教育，課題，中国の大学

1. 問題の所在

本研究の目的は、中国の大学におけるキャリア教育である「職業生涯教育」¹⁾に着目し、その導入および実施状況をインタビューにより明らかにすることで、

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：山田浩之（主任指導教員）、山崎博敏、藤村正司

「職業生涯教育」が抱える問題の構造と実態を検討することである。

大学教育の大衆化に伴い、中国の大学教育は、大衆教育とエリート教育、教養教育と専門教育の狭間で揺れ動いている。旧式の大学教育が生み出す画一的な人材は多様化を求める労働市場との間に大きなギャップを生じさせ、就職競争の激化を促す原因となった。それを背景に、今まで専門性の育成を強調し、エリート教育を行ってきた大学には、学生のキャリア形成への支援が求められるようになった。とくに、大学生の就

職意識問題が大卒就職難をもたらす一要因だと指摘される中、「正しい職業観」の育成が大学教育の課題とされ、職業生涯教育の大学への導入が促された。

中国で大学生の就職意識が問題とされているのは、その就職問題との関連からであった。大卒者の就職難問題が深刻化する中、「待遇の良い」都市部または国有セクターにこだわり、内陸や農村地域、中小の民营企业に就職したが大卒者が依然として数多く存在していることが指摘されている（張・劉，2006；登坂，2007；趙，2010など）。そのような「エリート的」就職意識は「高望み」や「現実離れ」だと批判され、就職難の原因だとされてきた。それを背景に、キャリア指導を通して「高望み」で「不適切」な就職意識を修正し、しっかりしたキャリア・ビジョンをもとに進路選択をすることが求められるようになった（楼・趙，2002など）。

このような問題意識のもとで、職業生涯教育は全国的に拡大され、「就職指導センター」から「キャリアセンター」へと衣替える大学が目立った（孫，2008）。職業生涯教育に関わるこれらの変化は、大学改革または就職難対策の華々しい成果として政府や大学によって宣伝されている。なかでも、大卒就職難の原因とされる大学生の意識問題に対する取り組みが強調されてきた。

一方、大学における職業生涯教育の抱える問題が指摘されてきた（孫，2008；王，2011など）。具体的には、「アメリカの模倣でしかない」という理論上の不備や、専門性のある教職員や資金の欠如などである。つまり、職業生涯教育の限界が露呈してきたことがうかがえる。

しかし、これらの研究は問題の提示にとどまり、職業生涯教育の実態と構造を実証的な資料を挙げて検討していない。ましてや中国の大学における職業生涯教育はどのようなもので、どのように実施されているかなど具体的な検討もほとんどなされてこなかった。

では、それらの問題はどのように生成され、どのように教育現場に反映されているのか。また、大学生や就職指導係はそれをどのようにとらえているのか。職業生涯教育の実態および構造を整理し検討することで、中国の大学における就職指導に示唆を与えられるであろう。

以上の問題意識を踏まえて、本論では、中国の大学における職業生涯教育がどのように政策的に展開され、現場で受け止められているかを、大学教員および学生へのインタビューを用いて検討する。

2. 政府主導による職業生涯教育

職業生涯教育の大学での展開を検討するまえに、まず、政策関連文書などから「職業生涯教育」という枠組みの基本的な性格について考察しよう。

(1) 急速な拡大

職業生涯教育は中国の大学で急速な拡大を遂げた。本節では、職業生涯教育の導入プロセスから、その急速な導入・拡大を促すメカニズムを考察する。

職業生涯教育が中国の大学において初めて登場したのは、2000年に北京大学などの一流大学によって主催された「大学生職業生涯設計」巡回講演であった。それを限られた一流大学から全国レベルに拡大させたのは、中国教育部が2006年に主催した「中国大学生職業生涯設計コンクール」であった。その背景には、大学の入学者募集定員の拡大が政策的に促された2000年に続き、2004以降の大卒就職難の発生と深刻化であった（裴，2011）。

「中国大学生職業生涯設計コンクール」は、政府の「大学卒業生の“基層（農村や貧困地区など）”への就職を誘導、奨励するための意見」（2005）に応えるために計画されたもので、大学生が自らのキャリアを考え、それを論文にまとめて報告するスピーチコンクールである。コンクールの開催にあたって、中国政府は地方政府を通して、各地方の大学の就職指導係にキャリア指導に関する講習を義務付け、大学生に「職業生涯設計」の指導を行うことを要請した。さらに、各地方の全国代表の選出を要請したことで、大学代表から地方代表へと、地方レベルの予選が繰り返され、全国の大学を動員することになった。コンクールに応募した大学生は12万人で、27省における700超の大学が参加することになったという²⁾。さらに、「中国大学生職業生涯設計コンクール」は開催する度に応募者の増加が見られた。2012年に1403大学の100万人の大学生が参加するに至り³⁾、職業生涯教育は全国の大学に一気に普及したのである。

「中国大学生職業生涯設計コンクール」の盛況の背後に、政府が強力に推進したことがある。とくに、コンクールの積極的な参加または受賞は、地方政府の業績、大学の業績の評価と直結するように仕組みられ、政府による統制が強いものだと考えられる。

職業生涯教育拡大の後を追うように、中国教育部はそれを正課にするよう要請した。2007年、中国教育部は就職指導を正課にする際、そこで職業生涯教育を取り入れるように提示した（「大学生职业发展与就业指导课程教学要求」）。さらに、2011年、大学の就職指導

に関する中国教育部の文書では、職業生涯教育のカリキュラムへの導入が義務化された。その具体的な内容は以下の通りである。

カリキュラムとカウンセリングに関して：カリキュラムに就職指導を取り入れる。職業生涯教育や起業教育の教育システムを作成し、現状に基づいた特色のある指導によって就職指導の目的性、有効性を高める。(2011「教育部关于做好2012年全国普通高等学校毕业生就业工作的通知」)

さらに、2013年、教育部は職業生涯教育の実施に関わる大学の就職指導係、とりわけ学年チーフ（大学の各学部で学生支援や就職指導を実質的に担当する者）向けに実施される講習内容の要項において、キャリア設計に関する基礎知識の習得を強調した。

以上からわかるように、職業生涯教育は政府の推進により急速な拡大を遂げた。では、どのような目的のもとで職業生涯教育の急速な導入と拡大が要請されたのか。次節では、政府が推奨する職業生涯教育の目的について具体的に検討する。

(2) 統制される職業生涯教育と就職意識

職業生涯教育の役割に対する政府の要請を整理すると、大学生の就職意識に関する記述が多々見られた。

職業生涯教育の全国レベルの拡大を促した「中国大学生職業生涯設計コンクール」の目的として、大学生の農村や貧困地区などの「基層」、とくに「基層」の中小企業へ就職すること、つまり「正しい就職観」の育成を促すことが挙げられている⁴⁾。そのような目的は後の職業生涯教育の実施にも大きく影響するものであった。

また、2009年、中国教育部は職業生涯教育と「大学生の思想・政治教育」との融合を提唱し、職業生涯教育に国家利益を反映することを要請した。そこで、大学生の「理想、信念の育成」、また「就職の方向性」を提示することがその目標とされた。ここでいう「理想、信念の育成」、また「就職の方向性」とは、国の利益を優先すること、また「基層」などでの就職をビジョンに入れることだと解釈できる。

さらに、同年、就職支援の事例として職業生涯設計への支援が挙げられた。以下はその実施目的を記述している。

湖南省は多様な職業生涯設計や就職指導教育などを通して、大学生の就職意識と就職志向の調整を促すように取り組んだ。(2009「教育部办公厅

关于印发部分地区积极促进高校毕业生就业工作举措有关材料的通知」)

さらに、2013年には大学の就職指導の末端である学年チーフへの講習でも、就職意識に対する働きかけを内容として取り上げている。その目的に関しては以下のように記述されている。

学年チーフの講習内容：職業生涯設計に関する教育。職業生涯設計の基礎知識、理論および方法論の教学を実施する。大学生の職業生涯設計(キャリアデザイン)を援助できるように能力を高め、学生の正しい就職観、就職観などの育成、または社会への適応を促進する。(2013「普通高等学校辅导员培训规划(2013-2017)」)

以上の記述では、中国の大学における職業生涯教育の目的として、大学生の就職意識の修正が強調されている。それは大学生の「高望み」な就職意識「問題」に由来したと考えられる。つまり、農作物や貧困地区への就職を嫌がる大学生の就職意識を修正するための道具、また大卒就職難への対応が求められる政府の「アリバイ作り」として職業生涯教育が導入された。

中国の大学における職業生涯教育は政府の推奨により急速に拡大し、また政府により大学生の就職意識を修正することが要請されている。このように、政府によって推奨され、性格を統制される職業生涯教育に、大学側はどのように応えているのか。また、大学における職業生涯教育に直接に関わる者として、就職指導係および大学生はそれをどのように考え、捉えているのか。次節では、職業生涯教育の大学での導入、実施およびその実態に対する評価を「当事者」の視点から分析する。

3. 「当事者」が語る職業生涯教育

3.1 調査の概要と分析枠組み

筆者は2013年の2～3月に、中国の地方である山東省における3つの総合大学の就職指導係および大学生を対象に半構造化インタビュー調査を行った。分析は「先行知見が少ないテーマに関して調査対象者の経験をその背景文脈を含めて多方面から追及することのできる」(湯川, 2011) 質的手法によって客観的事実の精査・解釈を試みる。

地方をフィールドとした理由は3つある。1つに、政府が職業生涯教育を推奨する際に北京や上海など大都市の大学を「モデル大学」として多く紹介してきた

のに対して、地方の大学における実態はほとんど把握されてこなかった。

2つ目の理由は、政府からの資金的、技術的サポートに恵まれ、注目を浴びる大都市の大学と比べて、全国に多く散在する地方の大学は職業生涯教育という新たな教育スタイルの実施において抱える問題が大きいと考えられる。

3つ目は、職業生涯教育の課題を提示した大学生の就職意識問題などの大学生研究は、北京や上海などという大都市、または上位大学を調査対象としたことが多く、それを土台とした職業生涯教育は地方の大学生のリアリティに答えられていない可能性がある。そのため、地方の大学における職業生涯教育の実施を検討することは中国の就職指導を問い直す大きな鍵となる。

なお、調査フィールドである3大学は山東省の総合大学である。ここでX大学、Y大学とZ大学と称するが、それぞれ国立、省立と市立という階層的構造になっている。また、調査対象となるのは、3大学の就職指導係6名および大学3、4年生7名である。調査対象の13名にそれぞれ1時間以上のインタビューを行った。また、事前に家庭背景や進路状況などがある程度把握しておく作業も行っている。そのプロフィールは表1と表2で示された通りである。

表1 就職指導に関わる教員のプロフィール

	性別	所属・職位	キャリア
A先生	男性	X大学キャリアセンター長	10年
B先生	男性	Y大学数学部・支援科科长	8年
C先生	男性	Y大学キャリアセンター長	10年
D先生	女性	Z大学文学部・学年チーフ	5年
E先生	男性	Z大学文学部・学年チーフ	2年
F先生	男性	Z大学キャリアセンター長	8年

注：「キャリア」として示した年数は、大学生の就職指導に携わる年数である。

表2 大学生のプロフィール

	性別	所属・学年	家庭状況
Gさん	女性	X大学文学部3年生	農村出身
Hさん	女性	X大学経済学部3年生	都市出身
Iさん	男性	Y大学法学部3年生	都市出身
Jさん	女性	Z大学文学部4年生	農村出身
Kさん	女性	Z大学文学部4年生	農村出身
Lさん	女性	Z大学文学部4年生	都市出身
Mさん	男性	Z大学文学部3年生	農村出身

以上の調査に基づき、次節以降は大学の就職指導係および大学生の語りから中国の大学における職業生涯

教育の実態に迫りたい。分析枠組みとして、①就職指導係の語りを用いて各大学における職業生涯教育の導入と実施の実態を明らかにする(3.2)。②職業生涯教育に対する就職指導係の評価を考察する(3.3)。③職業生涯教育に対する大学生の認識や評価を考察する(3.4)。

3.2 職業生涯教育の現状

先に、中国の大学における職業生涯教育の拡大プロセスおよびそれに求められた課題を政策から読み取った。では、大学の現場では職業生涯教育はどのように展開されているのか。本節では、大学の就職指導係の語りから職業生涯教育の教育現場への導入と実施について分析する。

(1) 政策に忠実に応える大学

職業生涯教育に対する大学の就職指導係の理解から教育現場における職業生涯教育の位置づけを明らかにする。就職指導係の語りから、職業生涯教育の導入における地方大学の受動性が指摘できる。その受動性は政策を鵜呑みにする大学の対応からうかがえた。

まず、「職業生涯教育ってどんなことをやっていますか」という筆者の質問に対して、多くの就職指導係は「授業科目の一つ」だと答えた。また、同じ質問に対してX大学のA先生は「職業生涯設計」の授業で使用する教科書を差し出した。就職指導係が職業生涯教育を「授業科目一つ」だと確信する様子は以下の場面から見受けられる。

*：職業生涯教育ってどんなことをやっていますか。

F先生：あれは…授業科目の一つね…

*：具体的に言うと…

F先生：まあ、ある仕事にどういう能力、どういう素質の人材を求めるか…みたいな、目標をはっきりしないとね。これよ、(本を差し出して)政府が配っている、優秀な事例とか(が載っている)。

*：これをモデルにやるのですか？

F先生：そう、カリキュラムに組まれたからね。
(2013/2/15)

*：職業生涯教育ってどんなふうを考えていますか。

A先生：必要な技能をマスターしてもらって、就職してからの適応期間を短縮させるようにね。

*：どんなことをやっていますか。

A先生：あ、教科書があるよ、確か(教科書を探す)。
(2013/3/5)

上述したように、「特色のある」教育形式を求めながら、実際の職業生涯教育の実施に関してはカリキュラムに取り込むことが強調されるのみであった。就職指導係が職業生涯教育を「多様」で「特色のある」ものとしてではなく、科目の一つとしてとらえることから、職業生涯教育のカリキュラムへの導入という政府の要請に忠実かつ形式的に応える大学の姿勢がうかがえる。これらのケースでは、導入の条件が十分ではないにもかかわらず、政策に忠実に応えようとする地方大学の姿がうかがえる。

加えて、F先生は職業生涯教育の実施に関して「カリキュラムに組みこまれたから」と語っている。その語りは、政府から押し付けられた職業生涯教育を機械的に受け入れる大学側の受動性をさらに表したものである。また、就職指導係の職業生涯教育に対する理解がその正課化に留まることから、「正しい職業観」など就職意識の修正に基づいたキャリア設計をサポートすることには限界が考えられる。

さらに、職業生涯教育の概念に対する理解だけでなく、現場における就職指導係がとらえる職業生涯教育の意味づけも、政策を反映したものであった。

先に述べたように、職業生涯教育が推奨されるきっかけとして最も多く語られてきたのは大学生の就職意識問題への対応であった。F先生の以下の語りはそのような政府の問題意識を忠実に受け止める就職指導係の姿を表している。

*：職業生涯教育は何のために取り入れられたと思いますか。

F先生：…就職意識の問題でしょう。意識を変えないといけないね、就職の。今は安定を求めるよね、大学生はみんな。…授業の時もいつも注意しているけど、一生に1つの仕事に終始するって考え方は捨てられて。(2013/2/15)

就職意識問題としての「高望み」問題(張・劉 2006, 趙 2010など)はここで、最も多く挙げられてきた「大手志向」ではなく「安定を求め」ことだと認識されている(F先生など)。それは高(2013)が量的データによって明らかにした地方の大学生の就職意識の特徴と一致している。つまり、地方の大学生の就職に日々携わってきた就職指導係は自らの経験に基づき、本来政府が提示した就職意識問題を再構成したのである。

しかし、就職指導係は自らの経験に基づき、大学生の就職意識問題を捉えなおしたものの、結果的にそれを就職意識問題に対する批判に回帰した。F先生は大

学生の就職意識を「安定を求める」「一生に1つの仕事に終始する」としてとらえている。それは地方の大学生の特徴に基づいた認識である。一方で、F先生はそのような就職意識を「変えないといけない」と考え、そういう考え方を「捨てる」ように大学生に指導している。つまり、大学生が一つの仕事に一生勤めると考え、初職に安定性を志望することが、地方の「高望み」問題として認識されていた。就職意識に対する認識は変わっても、それが問題視されることは免れなかった。

以上の分析からわかるように、地方大学は政策に対して忠実に、かつ形式的に職業生涯教育を導入し、取り組んでいた。その背景に、就職難に対する対応が要請され、政府からの評価を常に意識する中国の大学の受動性が考えられる。これについて、E先生は「山東省の場合、(大学の就職率が)80%を超えないと(いけない)、そう要求されている」と語っていた。就職率にノルマを設けることによって、大学に対する政府のコントロールが一層強まるのが考えられる。また、大学側が政府による評価を重視することは、C先生の以下の語りからうかがえる。

C先生：北京大学や精華大学などは、(うち)より取り組むのは遅いけど、取り入れた途端、影響力が大きかった…本にも載ったしね。(本を差し出し) こういう、政府が認めた大学の(職業生涯教育の実施)事例が載った本。…実は向こう(の一流大学)は声が大きいいし、看板も大きいから、きれいいごとを言ったらすぐに「お見本」になる。こっちは職業生涯教育でどう頑張ろうとも注目されない… (2013/3/1)

以上の語りから、C先生が職業生涯教育を実施するモデル大学のように、政府に認めてもらうことを非常に重視していることがわかる。

以上の分析からうかがえるように、政府の要請に忠実に応えることによって、大学は就職難への対応を示し、政府による評価の向上を希望している。職業生涯教育の急速な拡大の背後に、就職難への対応がノルマとして押し付けられた地方大学の姿がうかがえる。

(2) 形骸化する職業生涯教育

以上の分析からわかるように、中国の地方大学は政府の要請に応えるために受動的に職業生涯教育を導入していた。では、職業生涯教育は実際、どのように実施されているのか。本節では、職業生涯教育の実施状況を就職指導係の語りから分析する。

E先生は職業生涯教育の根幹を成す「キャリアデザ

イン」の授業を実際に担当している。彼は自らの仕事の「意味のなさ」について以下のように語り、職業生涯教育の形骸化を指摘した。

*：「キャリアデザイン」とはどんな授業ですか。

E先生：それは…どんなって聞かれても、みんなが同じ内容教えているよね。(担任が)集まって、授業のやり方を習うね…あとは教えられたとおりにやるね。…そう、教材のままに、パワーポイントも作ってもらって、それに沿って教える。でも、そんなに意味があるとも言えないなあ…1年生だしね…(授業の)時間帯も何回も調整したよ。…専門の先生は教育学部の先生で、かれらがモデル授業を私たちにみせてね…あとは同じように学生に教える。(2013/2/16)

E先生は専門的な知識を持ち合わせておらず、「モデル授業を見せて」もらって「教えられたとおりに」授業を教えているという。つまり、「職業生涯設計」の授業を担当するのは専門の教員ではなく、学生支援に携わる学年チーフなのである。必然的に、かれらが担う職業生涯教育は模倣でしかなかった。さらに、授業の実施時間も保証されていなかったという。

以上の分析から、専門性のある教員など、職業生涯教育の実施に必要とされる条件が備えられていないまま、地方大学が職業生涯教育を取り入れなければならない実態がうかがえる。

職業生涯教育の大学での導入および実施からわかるように、職業生涯教育は政府によって押し付けられたもので、その実施に形骸化した傾向が見られている。では、このような職業生涯教育に対して、大学の就職指導係はどのように評価しているのか。

3.3 就職指導係の評価

本節では、大学の就職指導係が職業生涯教育をどのように評価しているかについて分析する。

(1) 職業生涯教育の支持者

まず、職業生涯教育の効用を高く評価する就職指導係がいた。そのなか、B先生とD先生の語りがある。

B先生：学生の反応は、全体的にいいね。やる必要があるって。先生たちもまじめにやっているし。

*：具体的にどういう影響があると思いますか。

B先生：そうですね。キャリアデザインはできたはずだと思う。(2013/3/1)

D先生：(職業生涯教育)もっとも効果があるのはどこかという、この授業をやるかやらないかで、学生の意識が違ってくる…私は何のためにここに来たか、何ができるか、私はそれを達成するために何をすべきなのか、どの能力が必要なのか(が分かってくる)。…どんな職業に向いているのかってすぐにチェックできる。このような職業にどんな技能を持ったほうがいいかってわかる。…2006年の学生はこういう授業を受けてなかったから、とても困っていた。

(2013/2/16)

以上に示したように、一部の就職指導係は職業生涯教育によって、大学生が就職意識の転換を果たしたと評価した。その語りから、職業生涯教育は大学生に自らの適性を提示しただけでなく、その達成に必要な能力も提示する。つまり、職業生涯教育は大学生を適職に導くように機能していると、D先生が主張している。その一方で、「職業生涯設計」の授業を受けていなかった大学生が「とても困っていた」と、職業生涯教育の取り入れは大きな意義があるように語られていた。形骸化が見られたにもかかわらず、職業生涯教育は大学生の就職意識の転換において効果的に機能することが主張されている。

(2) 悩まされる就職指導係

次に、職業生涯教育に対する懐疑的な意見もうかがえた。以下の語りは、就職指導係の一部が自らの仕事に無力感を覚えていることを示している。

E先生：まあ、わたしもあんまりちゃんと(職業生涯設計)教えてないけど…なんでっていうと、就職指導してもんはね、ふうう(ため息)、指導してためになるか?…

(2013/2/16)

B先生：誰の影響が強いかというと、親だよ。大学生は親の話聞くよね。去年卒業した4年生、大学院も合格したし、いいところの就職も決まったね。で、どっちにするか(について)その親から相談話を持ってきた。私は就職が難しいから断然に就職したほうがいいって言ったけど、結局彼の親は進学させたよね。だから、大学生はみんな親のいいなりになっているから、私たち(教員)はどう指導しようが、効果があんまり…

(2013/3/5)

以上の語りからわかるように、調査対象の中で最も経歴の浅いE先生は職業生涯教育だけでなく、就職指導に対して「指導してためになるか」と疑問を投げつけた。また、8年間のキャリアを持つB先生も「大学生はみんな親のいいなりになっているから、私たち(教員)はどう指導しようが、効果があんまり…」と語り、大学による指導のインパクトのなさを嘆いている。経歴に関わらず、就職指導係は自らの仕事に対する無力感を共有している。そのなか、B先生が語った進路指導の失敗経験はA先生の語りからもうかがえる。A先生は大学生に薦めた「待遇のいい」ポストを「私営では不安定」などの理由で断られたという。

就職指導係が共有する進路指導の失敗経験は、大学側の大学生の就職・進路に対する価値判断と、大学生またその親の判断基準とのギャップに原因があると考えられる。「高望み」またはそれを前提とした大学院進学は大学生またはその親の利益を反映したものだと考えられる。それに対して、その問題の修正を目的とする職業生涯教育に取り組むことで、大学は大学生の利益の対立面に立つことになる。そのように、個人の利益を無視する職業生涯教育による就職意識指導は大学生に受け入れられず、就職指導係の無力感をもたらしたと考えられる。

同様に職業生涯教育に疑問を感じたのは、Y大学のキャリアセンターのセンター長であるC先生であった。彼は中国の職業生涯教育に足りないものを以下のように客観的にとらえている。

C先生：授業はただ理論上で支援するよね…個人の場合は自分で考えて、自分で解決してもらえない…職業生涯教育を本気でやろうと思ったら、その研究をしないといけないよね。…今はただ他人のまねをして、ほかの大学はどうやっているか、ほかの国はどうやっているのかを、そのまま持ってきて、同じように学生に授業して、講座を開いて、指導を行う。…今うちでやっているのは…学生に意識すべきだと言っているだけ…(効果とかは)テストで測れないものだから。(2013/3/1)

以上のように、C先生は「学生に意識すべきと言っているだけ」と職業生涯教育の実態を明かし、その形骸化を批判した。また、「職業生涯教育を本気でやろう」としたところで、実施上における理論の欠如および評価の困難性に悩まされたという。職業生涯教育の現状を納得できないが、その改善に困難を感じると苦悩す

る就職指導の担当者の姿がうかがえる。

以上の分析からわかるように、大学の就職指導係は大学生の意識を対象とした職業生涯教育に無力感を覚えている。その原因として、教員の指導が大学生に受け入れられないことがうかがえる。

しかし、職業生涯教育が大学生に受け入れられず、苦悩する大学の就職指導係がいる一方、一部の就職指導係は職業生涯教育が大学生から評価されると、その効果を肯定的に語っている。では、実際、大学生の職業生涯教育に対する反応はどのようなものなのだろうか。

3.4 「当事者」としての大学生

本節では、職業生涯教育に対する大学生の捉え方について分析する。

(1) 期待する大学生

大学生の語りから、かれらは大学側のサポート、とくに進路相談などに期待していることがわかる。大学側によるサポートを期待する語りとしてJさんのものがある。

J：ホームルームにね、年に1、2回しか会えない担当が来て、なんか、本当に良いことを言っているというか、とても正しく聞かえるよ。

*：どんなことをいうの？

J：生活で注意することとか、勉強とか、これからの進路やなど。経験者だから、いろいろ言えるの。…実はいろいろ相談したいよ、(大学が)何かあったらすぐ学生のせいにするのじゃなかったらね。(2013/2/20)

Jさんの語りから、「年に1、2回しか会えない担任」、つまり学年チーフが「経験者」であるため「いろいろ言える」と信頼し、その指導を期待する大学生の姿がうかがえる。そのように学年チーフに対する親近感を示したのはKさんとGさんなどもいた。

先生側の語りでは、大学生が大学による進路指導に耳を貸さず、「親のいいなり」だと語られていた。しかし、ここでは大学側のサポートを期待する大学生の姿がうかがえた。そのギャップをもたらしたのは、職業生涯教育による意識指導の形骸化が考えられる。また、その形骸化の原因として、「(大学が)何かあったらすぐ学生のせいにする」ことが考えられる。つまり、大学生の就職意識問題に対する一方的な批判は、大学への信頼を阻害している。就職意識の修正に位置づけられた職業生涯教育ではなく、素朴ではあるが親身に

なる経験談が期待されているよううかがえる。

一方で、Jさんは「担任」と会うのは「年に1, 2回しか」と語っている。Gさんからも「担任1人が2つの学年で何百人の学生の面倒を見ている」といい、「自分のことで相談に行きづらい」と語った。にもかかわらず、大学生は「相談に行ったらきちんと相手にしてくれる」と学年チーフを信頼している様子が見受けられる。そのような「年に1, 2回しか」会えない学年チーフに大学生が期待していることから、大学側によるキャリアサポートに対する大学生の切実な要望がうかがえよう。

(2) 学生による批判

前述した分析から、中国の大学生は「何かあったらすぐ学生のせいにする」大学に反感を覚えている一方、大学側によるキャリア指導を期待していることがわかった。では、既存のキャリアサポートである職業生涯教育は、大学生の期待に応えることができていいのか。本節では、大学生による職業生涯教育に対する評価について分析する。

「職業生涯教育を受けてどうだった」という質問に対して、一部の大学生は批判的な声を上げている。その批判は以下のような語りから読み取れる。

M: あー、職業生涯設計だね、めっちゃくちゃだよ…人生とかいうけどね、でかい話ばかりだったよ。…ウケるけどね。適職テストで自分の適職がサーカスの調教師だって(笑)、しかも(この結果が出たのは)自分だけじゃないみたい(笑) (2013/2/19)

*: 職業生涯教育ってどんなもんがあった？ どうだった？

J: あれはだめよ、全然役に立たん。聞こえがいだけよ…誰も授業を教えてくれなかった。担任がテキトウに何回かやったことがあるけど、教科書を読んだり、心理テストしたり…心理テストの結果についても教えてくれなかった。テキトウよ。自分らのことをまったく分かっていないくせに。(2013/2/20)

職業生涯教育に対するMさんの「ウケ」た反応またJさんの「キレ」た反応が見られた。

そのなか、Mさんが「茶番」のように語った職業生涯教育による「適職」判定の事例は興味深いものであった。キャリア研究がなされないままに職業生涯教育の導入と拡大を遂げた中国の大学は、アメリカの

Career Educationの理論を都合よく取り入れ、それを「適職探し」のフレーズとして就職意識の修正に用いた。そのため、アメリカで発足した適職モデルはそのまま「職業生涯設計」の教科書に盛り付けられ、職業生涯教育の理論を偽る道具となった。中国の大学における職業生涯教育が中国社会のリアリティを反映できていないことは、その形骸化の深刻さがうかがえる。

また、就職指導係の授業への取り組みが「テキトウ」と訴えたJさんの語りは、先述した「あまり(まじめに)やっていない」というE先生の語りと一致している。就職指導係の職業生涯教育に対する無力感は大学生に敏感に読み取られていることがわかる。

さらに、「自分らのことをまったく分かっていない」と、職業生涯教育による指導を批判したJさんの語りは、大学生の問題に答えられていない職業生涯教育に対する批判がうかがえる。それはE先生の語りにおける授業内容の形骸化に原因が考えられ、また、前節で取り上げたJさんの「何かあったらすぐ学生のせいにする」こととの関連も考えられる。つまり、既存の職業生涯教育は大学生の期待に応えられておらず、むしろ大学生を強い大学不信に走らせていた。

一方、職業生涯教育に期待を裏切られ、怒りを感じた大学生もいれば、その存在すら忘れ去ろうとする大学生もいる。X大学のHさんは「職業生涯教育って知っている」という筆者の質問に対して、「確かにあったような」と授業を受けたことをはっきりと覚えていないようであった。また、彼女にとってそれは「そんなに自分らと関係なかった」もので、進路については「自分で考えられる」と自信あふれる様子であった。Hさんの冷めた反応も一部の大学生を代表したものである。職業生涯教育、または「職業生涯設計」はその形骸化された教学スタイルのように、形式だけ大学生の中に残ったのである。

職業生涯教育に対して大学生が怒りを感じたり、無関心であったりという態度の分岐はその属性に原因があると考えられ、大学生の多様性がうかがえる。KさんやJさんのように「怒り」を感じるのではなく、Hさんは無関心な態度を取るのには、彼女がランクの高いX大学の大学生であり、さらに経済学部という「就職に強い」専攻に所属していることに原因があると考えられる。Hさんのような記憶が曖昧な様子はY大学のIさんなど、ほかの大学生にも見られている。そのなかでIさんの大学はランクがそれほど高くないが、法律学部という専門性の高い専攻に在籍している。また、大学側のサポートに期待を示したKさんとJさん、また職業生涯教育を「めっちゃくちゃ」と批判するMさんは農村出身者であるのに対して、HさんとI

さんはともに裕福な家庭の出身者である。職業生涯教育に対する期待または捉え方は大学生の所在大学や専攻、とくに家庭背景に影響を受けていることが考えられる。

以上の分析からわかるように、「どう指導しようが」「親のいいなり」である大学生は実際大学側のキャリアサポートを期待している。また、既存の職業生涯教育に対して怒りを感じたり、無関心であったりする大学生が見られたが、どちらもその効果を否定している。「とても役に立った」「受けていなかった大学生がとても困っていた」と職業生涯教育を高く評価するする就職指導係に対して、大学生がそれを批判的に捉えていることから、その間の認識のギャップが大きいことがわかる。つまり、キャリアサポートに対する大学生の期待が裏切られ、その評価も書きかえられていた。政府の要請に対応するばかりで、大学生の要望を無視する大学の取り組みは、大学生の批判を招いているようにも見える。

4. まとめと考察

以上の分析をふまえれば、本論での知見は以下の4点にまとめられよう。

- ① 中国の大学における職業生涯教育は政策によって急速に導入され、拡大していった。また、その目的として、大学生の就職意識を修正することが強調されている。
- ② 中国の大学における職業生涯教育は政府の要請を受けて導入され、その実施においては形骸化の傾向が示唆された。
- ③ 職業生涯教育に関して、大学の就職指導係のなかにはその効果を強調する者もいるが、その意味を疑い、無力感を覚える就職指導係の姿が目立った。
- ④ 大学生は大学によるキャリア支援を期待している一方、職業生涯教育に対しては否定的態度を見せた。

大卒就職難が深刻化する中、政府は大学生の就職意識問題を就職難の要因として取り上げ、大学にそれを修正するように要請した。このように、職業生涯教育の導入は大卒就職難を大学生の自己責任化する道具であり、また大卒就職難への対応が求められる政府の「アリバイ作り」でもあった。このような道具化された職業生涯教育に形骸化が見られたのは必然だと言えよう。

しかし、政府による職業生涯教育の推進は、大卒就職難問題の責任を大学生に押し付けただけではない。

それは次のように、さらなる問題を招きかねない。

まず一つ目に挙げられるのは、職業生涯教育の導入は、就職難または大学生の就職意識に潜む問題を隠蔽し、就職に不利な者を排除してしまう恐れがある。たとえば、高（2013）は大学生の就職意識に潜む問題は、大学生の就職意識における階層差にあると指摘している。職業生涯教育は、表面化された就職意識問題に取り組むことで、就職意識のメカニズムに潜む階層問題から目を逸らし、不平等を助長しかねないと考えられる。さらに、待遇の良い初職にこだわり、転職志向が低いという問題視された就職意識は「自由に労働市場を移動できない」社会関係資本を持たない大学生に顕著に見られている（高 2013）。職業生涯教育による就職意識転換の推奨は社会資本の低い大学生の就職における不利を自己責任化し、それを社会的配慮から排除することとなりかねない。

二つ目として、現在行われている職業生涯教育は大学不信を助長する可能性が考えられる。大卒就職難のため、「大学で勉強しても就職できない」という「学習無用論」が世論として広がり、強い大学不信がもたらされた。職業生涯教育の導入は、大学による就職難への対応を誇示する意図も考えられるが、その形骸化は本来の意図に背くものであった。本論の分析から、職業生涯教育の大学への導入は、大学の就職指導係の自らの仕事に対する自己肯定感の低下、大学生の大学不信をもたらししていることがわかった。大学生の就職意識の修正を土台とする職業生涯教育は、大学生就職に潜む真の問題を隠蔽し、大学の就職支援システムの非合理化を促すだけでなく、大学人を翻弄し、大学生のみならず就職に携わる就職指導係の大学に対する不信感を強めたと考えられる。

しかし、形骸化した職業生涯教育を懐疑的に捉えているにもかかわらず、一部の大学生は大学側によるサポートを期待することが分析からうかがえた。とくに農村出身の大学生が大学に対して抱く期待は顕著なものであった。それは、上述した就職意識における格差問題を反映したものだと考えられる。家庭背景によって大学生が就職に抱える難題が異なり、農村出身者など家庭背景に恵まれない大学生はとりわけ大学による支援を求めている。そのため、家庭背景による就職格差、就職意識格差などを含め、多様な大学生像を意識したうえでキャリアサポートが大学における就職支援の課題となる。

本論は中国の地方大学を取り上げ、その職業生涯教育の抱える問題および問題を生み出すメカニズムを検討した。なお、大学または専攻の性格、立地によって職業生涯教育の様相に複雑さがあり、本論の結果を一

般化することには限界があると考えられる。しかし、地方の大学が認識の多様性を呈しながら、政策に「規範」論に振り回され、形骸化したキャリアサポートに取り組む本論の分析結果は、中国の大学における職業生涯教育の課題を探るための事例研究の蓄積に資することができたと見えよう。今後は、職業生涯教育の大学での発展を追跡しながら、大学生の抱える問題に着目することで大学教育におけるキャリアサポートのあり方について検討していきたい。

【注】

- 1) 中国の先行研究や世論では「職業生涯企画（職業生涯规划）」や「職業企画（职业规划）」などの呼び方も一般的だが、ここでは日本語の文脈を考慮して「職業生涯教育」と称する。
- 2) 「航天杯」中国大学生職業生涯設計コンクール・主催者サイト http://ecjtu.fitoo.com/Help/Hp_mnote.aspx?Imh_id=20 (2013年7月6日アクセス)
- 3) 2009年、「中国大学生職業生涯設計コンクール」が「全国大学生職業生涯設計コンクール」と改名し、改めてスタートすることになったが、ここでは、触れないことにする。百度・全国大学生職業生涯設計コンクール <http://baike.baidu.com/view/5847883.htm> (2013年7月6日アクセス)
http://www.jyb.cn/high/gdjyxw/201205/t20120524_494446.html (2013年7月6日アクセス)
- 4) 「航天杯」中国大学生職業生涯設計コンクール・開催要旨 http://www.gradjob.com.cn/News/news/200606/200606_282.htm (2013年7月6日アクセス)

【参考文献】

伊藤一雄, 1998年, 『職業と人間形成の社会学』 法律文化社。
袁新文, 2009年, 「感受「春之声」—解读国务院加强高校毕业生就业7项举措」『大学生就业』。
王芹, 2011年, 「普通本科院校大一新生职业规划教育初探」『科技向导』23期, p.21。
教育部办公厅, 「教育部办公厅关于加强普通高等学校学生就业思想政治教育的通知」中国教育新闻网 http://info.jyb.cn/jyzck/200904/t20090410_262642.html (2013年7月6日アクセス)
教育部办公厅「教育部办公厅关于印发《大学生职业发展与就业指导课程教学要求》的通知」。 <http://baike.baidu.com/view/3442602.htm> (2013年7月6日アクセス)

郝登峰, 2010年, 『大学生就业创业理论与方法』 人民出版社。
高桥・孙权, 2006年, 『大学生就业指导』 清华大学出版社。
高静, 2013年, 「中国の地方都市における大学生の就職意識—家庭背景による社会関係資本の影響を中心に」『教育研究ジャーナル』第12号, pp.11-20。
山东省人事厅, 2008年, 『新编大学生职业发展与就业指导教程』 山東大学出版社。
全国高等学校学生信息咨询与就业指导中心, 2009年, 『全国高校卒業生就業状況(2004-2008)』, 北京大学出版社。
仙崎武・藤田晃之, 2008年, 『キャリア教育の系譜と展開』 雇用問題研究会。
谷内篤博, 2006年, 『大学生の職業意識とキャリア教育』 勁草書房。
中国教育部「教育部关于做好2012年全国普通高等学校毕业生就业工作的通知」
http://www.edu.cn/bi_ye_sheng_787/20111122/t20111122_709719.shtml (2013年7月6日アクセス)
张义明・刘志侃, 2006年, 「大学生现代就业意识—高校就业指导的逻辑起点」, 『贵州工业大学学报社会科学版』, pp.92-94。
赵海燕, 2010年, 「大学生就业取向影响因素分析」, 东北师范大学修士論文。
登坂学, 2007年, 「中国における高等教育普及と就職難」『九州保健福祉大学研究紀要』(8), pp.35-44。
村上純一, 2011年, 「今日におけるキャリア教育の高等教育への拡大とその課題」, 『東京大学大学院教育学研究科教育行政学論叢』, 第30号。
Mycos・中国大学生就业研究科著, 2009年, 『2009年中国大学生就业报告』, 社会科学文献出版社。
裴利华, 『职业教育研究』, 2011年, 第9期, pp.7-10。
<http://www.cqvip.com/Read/Read.aspx?id=39201275#> (2013年7月7日アクセス)
潘晨光, 2009年, 『2009中国人财发展报告』, 社会科学文献出版社。
頼徳胜等, 2008年, 『中国大学毕业生失业问题研究』 中国劳动社会保障出版社。
李敏, 2011年, 『中国高等教育の拡大と大卒者就職難問題』 広島大学出版社。
楼仁功・赵启泉, 2002年, 「大学生职业教育规划指导的探索与实践」『中国高教研究』第6期, pp.87-88。
湯川やよい, 2011年, 「アカデミック・ハラスメントの形成過程—医療系女性大学院生のライフストーリーから—」『教育社会学研究』第88集, pp.163-182。